



代表取締役
近藤 修司 氏

取締役会長
近藤 哲史 氏

株式会社 富士紙器印刷

<http://www.fujisiki.co.jp/>

本社・工場 : 神奈川県横浜市港北区綱島東 6-2-35

TEL: 045-859-9155

創業 : 1930年(昭和5年)

代表取締役: 近藤 修司



紙器・貼り箱製作にも LED-UV 印刷活用の波が到来

LED-UV 印刷の活用シーンは、これまでは薄紙・商業印刷が主だったが、近年はパッケージ印刷での活用例が増えている。紙器印刷と貼り箱の両方を手掛ける株式会社富士紙器印刷は、2018年12月にA全判4色機 RMGT 940ST-4 (水性/LED-UV 兼用コーティングユニット、IR/LED-UV 乾燥装置搭載、以下「RMGT 9」と略する)を導入した。厚紙から薄紙まで対応できる同機の特徴を活かして、従来は外注対応していた包装紙など薄紙印刷を取り込むとともに、LED-UV の即乾性を活かして、インキを盛った迫力ある高付加価値パッケージに取り組みビジネス拡大を図っている。

将来も通用する LED-UV を選択 RMGT 940はK全判にジャストフィット

1930年に東京都台東区で紙器加工専門としてスタートした富士紙器印刷。現在は多品種・小ロット・短納期という市場トレンドに応えるべく、企画・デザイン・構造設計の上流から印刷、そして抜き、製函の下流工程まで、パッケージの一貫生産体制を整え、紙器印刷と貼り箱の双方の製作に対応できる体制を備えている。

「当社の工場はこれまで、近隣の複数箇所に点在していた。これらを1カ所に集約した新本社・工場

へ移転する再スタートを契機に、これまで長く稼働させてきた印刷機も、新しくきれいな工場に見合うものに更新することを決めていた」と近藤哲史会長は機械導入のきっかけを語った。新台導入を主導した石井執

行役員は印刷機の選定について「小ロット・短納期への対応力の高さ、この先長く通用する印刷技術を採用するという方針を決めていたので LED-UV 印刷機を選択した。(大手文房具メーカーの仕事も多く手掛け



水性/LED-UV 兼用コーティングユニットに、IR/LED-UV 乾燥装置、セミロングデリバリーを備えた A全判4色印刷機 RMGT 940ST-4+LED-UV+CC+SLD

る当社では)小ロットがほとんどでサイズのK全判(640×940mm)が多いので、RMGT 940がピッタリ合っていた。RMGT 本社に出向いて印刷テストを行ったが、給紙や用紙搬送の安定感にすぐれ

ていて、印刷の仕上がりも申し分なかった」と振り返る。

この印刷機の選定中に、水性/LED-UV 兼用コーティングユニットに、IR/LED-UV 乾燥装置、セミロングデリバリーを備えた A全判4色機を導入したユーザーを訪問した。厚紙パッケージから薄い包装紙まで1台でこなすその会社の仕事内容が、同社が望んでいた形を体現していたことも後押しとなり、その会社での稼働機とほぼ同様の機械構成を選んだ。



印刷品質管理システム搭載は必須 機械に任せられる工程は機械側で

この RMGT 9 にはインラインで品質検査と自動濃度追従を行う印刷品質管理システム PQS-D (I+C) を搭載した。「基本的にワンマンオペレーションで運用するので、機械にできる作業は機械に任せたい。また最近では『何で管理しているの?』と尋ねるお客様が多く、品質検査装置は、もはや差別化を図る



取引先をお招きして、2019年3月に開催した内覧会。ここでも印刷品質管理システム PQS-D が注目を浴びた。

内製化できるようになったからだ。「RMGT 9は幅広い仕事に対応でき、これまで外注で対応せざるを得なかった薄紙印刷が社内のできるようになった。そこで、これまで考えたことすらなかった包装紙などの製作も手掛けられるようになった」と、近藤修司社長は RMGT 9 によって新たな商材が得られた効果を語っている。

ための武器ではなく、備えていることが当然なものだとお客様が考えるようになりつつある」と石井執行役員はその狙いを明かしている。新しい工場と RMGT 9 をお披露目する内覧会を 2019 年 3 月に開催した際も、お客様からこのシステムを高く評価していただけたという。

厚紙/薄紙に対応する 高い汎用性が 新たなビジネス分野 獲得への武器に

RMGT 9 の導入は同社の経営面に好影響を与えた。現在の稼働状況は、1 日あたり平均



して 18 ジョブ、3 万枚だ。これまで稼働させてきた菊全判 4 色機と比較すると、印刷速度の向上およびジョブチェンジ時間の大幅な短縮が図れた

こともあり、生産性は 1.5 倍を超える。「これまでの油性印刷機は毎時 7,000 枚のスピードで印刷していたが、今は毎時 1 万枚で印刷している。



小ロットの仕事が多いが、自動化機能によってジョブチェンジ時間が短縮したので生産性が大きく向上した。これにより外注費が減ってきている」(石井執行役員)。

同社の外注費が減少したのは、生産性向上によってこれまでオーバーフローしていた仕事を内製できたこと以外の要因もある。以前の印刷機は厚紙専用モデルだったため薄紙の仕事はすべて外注していたが、それを

LED-UV の高い乾燥性能によって パッケージに迫力と高級感を付与

RMGT 9 のインキ乾燥性能については、LED-UV 用インキの機能向上もあり、ベタに全面ニスをかけても 60 % 程度の照射強度で対応できているという。インキが即乾するので、しっかりとしたベタ印刷ができるとともに、当然ながら紙面へのパウダー残りもない。「インキを盛ることができるのでベタ物に迫力と深みが出る上、アルミ蒸着紙へ白打ちする際に 2 度打ちする必要もない。またセミロングデリバリーを通すことでインキのレベリングが良くなるので、光沢のある鮮明な印刷ができ、油性印刷のリピートジョブでも色味に変わりがない。RMGT 9 の基本性能の高さによってパッケージ製品の高級化を図ることができ、お客様にとどまらず同業者からも高い評価をいただけている」と近藤哲史会長は語る。

表面加工による高付加価値化で パッケージの中身への興味を喚起

この RMGT 9 には水性 / UV 兼用のインキインニスコーターが搭載されている。表面加工の内製化を図るという目的に加え、顧客ニーズに合わせて高付加価値化への対応と営業提案力向上を目標とのものである。「LED-UV ニスがまだ発展途上だったので水性ニスも必要と考えて兼用仕様とした。しかし、LED-UV ニスの黄変について印刷物発注者から指摘されたケースはない。むしろ、兼用仕様としたことでさまざまな表面加工ができるようになり、顧客から『このような物を作ってもらえないか?』といった、これまではなかった要望や質問を



印刷機と同時に導入した無処理版 CTP



サックマシンによる製函ライン



貼り箱の製造ライン

いただけるようになった。当社にとっての喜びは、一般消費者が手に取りたくなくなったり目を引くようなパッケージを製作し、そのおかげで内容物に興味を持ってもらえたり売上が増えるようになること。言い換えれば、顧客のビジネスに少しでも貢献することだ。それが RMGT 9 によって実現できている。今後は、環境配慮製品や高級品、さらには LED-UV 印刷機だからこそできる印刷製品の開発に努めたい」と近藤哲史会長がその効果について語るように、RMGT 9 は同社のビジネスを大きく弾ませる起爆剤となっている。



「御社のウリを見せてください」の問いかけに、選んだ製品を前ににっこり。